



国内希少野生動植物種アカモズの人工育雛に成功しました

人間環境大学 環境科学部フィールド生態学科 助教 岡久雄二

人間環境大学環境科学部フィールド生態学科岡久研究室では、豊橋総合動植物公園、長野アカモズ保全研究グループと共同で、全国で残り 200 羽程度しかいない渡り鳥アカモズ *Lanius cristatus superciliosus* の生息域外保全を試みています。

このたび、長野県内において親鳥が放棄した巣などから採取した卵を豊橋総合動植物公園に移送し、世界で初めてアカモズ 9 羽の人工孵卵・育雛が成功しました。このほかに、野生下で衰弱したヒナ 2 羽を保護し、計 11 羽のアカモズを飼育しています。人工育雛の成功は、絶滅の危機に瀕しているアカモズの保全に対して極めて重要な成果です。



今回の人工育雛で育ったアカモズ

参考

亜種アカモズ：日本のみで繁殖し東南アジアで越冬する渡り鳥である。環境省レッドリストで絶滅危惧 IB 類に選定され、種の保存法において国内希少野生動植物種に指定されている。本州個体群については、繁殖地の環境は大きく変化していないにも関わらず、帰還率や繁殖成功が低下し、個体数が減少している。2022 年時点で 45 つがいのみが確認されており、2026 年にも地域絶滅することが予測される。本種の絶滅を回避するためには、生息域内保全を進めると同時に、生息地域外保全を推進することが必要とされている。

お問い合わせ先

- ・人間環境大学環境科学部フィールド生態学科 助教 岡久雄二 Tel 0564-48-7811(代)
- ・豊橋総合動植物公園 専門員 吉川、主査 木谷
- ・長野アカモズ保全研究グループ 代表 松宮裕秋



【背景】

世界的な生物多様性の減少と絶滅種・絶滅危惧種の増加を受けて、野生動物を自然の生息地以外で保全するという生息域外保全の取組みが重視されています。これは野生の生息地だけでは十分な保護が難しい場合に、飼育下に保険個体群を確保することで絶滅リスクを低減させ、将来的には野生復帰を通じて生息域内の個体群の保全を行うという取組みです。

人間環境大学環境科学部フィールド生態学科岡久研究室では、以前よりトキ *Nipponia nippon*、シロハラサギ *Ardea insignis* 等の絶滅危惧種の生息域外保全と野生復帰について専門的見地からの分析と提言を行ってきました。本年より、人間環境大学、豊橋総合動物公園、長野アカモズ保全研究グループ、森林総合研究所、信州大学、北海道大学地球環境科学研究所、(社)野生生物生息域外保全センター、国立環境研究所、山梨県富士山科学研究所、環境省信越自然環境事務所等が連携し、国内希少野生動植物種アカモズの安定的な存続を目指し、生息域内における巢の保護と救護、緊急避難的措置としての生息域外保全、越冬地および渡り中継地での情報収集、細胞の保存等の取組み等を開始いたしました。

【アカモズの現状】

アカモズはスズメ目モズ科の鳥類であり、東アジアに広く分布します。そのうち亜種アカモズは東南アジアで越冬し、日本のみで繁殖します。かつては日本各地に広く生息していましたが、その繁殖分布は過去 100 年間で 90.9%縮小したと推定されており (Kitazawa *et al.* 2022)、2022 年時点において本州と北海道の一部地域で 200 羽程度の繁殖が確認されているのみです。

本州については、2015 年から長野アカモズ保全研究グループと東京大学、山梨県富士山科学研究所を中心としたモニタリングと繁殖地におけるアカモズの保全活動が行われてきました。2015 年から 2018 年にかけてアカモズの個体数は一時的に増加傾向にありましたが、2019 年以降になると個体数が減少に転じ、2022 年には減少率が年 30%を超え、45 つがいが残るのみとなっています。現在の状況が続くと、本州の個体群は 2026 年から 2030 年に絶滅することが予測されています。

アカモズの減少要因として、植生遷移と開発によって全国的に繁殖適地が縮小したほか、現在残された繁殖地ではカラス類、アオダイショウ、ハクビシン、ネコ、ホンダギツネ等によって捕食される巢の割合が高いことが確認されています。また、アカモズは渡り鳥であることから越冬地や渡り中継地の環境変化がその生存率に影響しているものと考えられます。本州個体群では、繁殖環境が大きく悪化したことは確認できないにも関わらず、帰還率や繁殖成功が低下し、個体数の減少が続いています。



【令和5年度の取組み】

繁殖地における保全活動によってアカモズの生存率と繁殖成功の向上を図るとともに、環境省による許可のもと、緊急避難的措置としての生息域外保全を開始いたしました。

アカモズの飼育は世界的に例がない試みであったことから、本年4月からは近縁種モズ *L. bucephalus* の卵を長野県において採卵し、乗用車を用いて豊橋総合動植物公園へ移送し、孵卵器で卵を温め、孵化した雛を育てることでモズ科鳥類の飼育繁殖の技術確立を図りました。この取り組みにより、モズ5羽を巣立ち齢まで育成することができました。

さらに、5月より長野県に生息するアカモズのモニタリングと巣の捕食対策、放棄卵と傷病個体の保護収容を実施しました。5月29日から6月27日までの間に、巣内への異物の落下や天敵による襲撃などによって抱卵を放棄された卵（8巣より計29卵）を、乗用車を用いて豊橋総合動植物公園へ移送しました。これらの卵を人工孵卵することで、6月18日から7月12日までの間に13羽のヒナを孵化させることができました。さらに7月1日から7月27日にかけて、このうち9羽を巣立たせることができました。

このほかに、6月23日および7月7日に衰弱したヒナ3羽を繁殖地で保護し、このうち2羽を豊橋総合動植物公園へ移送し、人工育雛することで、7月16日に巣立たせることができました。これらの取り組みにより、豊橋総合動植物公園において11羽のアカモズの飼育を行っています。

【今後の取組み】

今回の人工育雛の成功は、絶滅の危機に瀕しているアカモズの保全に対して極めて重要な成果です。現在飼育している11羽をファウンダー（始祖個体）として飼育下での繁殖を実施することで、飼育個体群を確保し、アカモズの短期的な絶滅の回避を目指します。また、生息域内での保全活動を通じてアカモズの減少を抑制し、将来的に飼育下で生まれた個体を野生復帰させることで、アカモズの野生個体群が安定的に存続可能な状況に達することを目指します。

【担当教員略歴】

岡久 雄二 人間環境大学環境科学部フィールド生態学科 助教
博士（理学）。立教大学特別研究員、環境省野生生物専門員、同省希少種保護増殖等専門員を経て、2022年より現職。アカモズ保全ワーキンググループ代表、IUCN SSC Stork Ibis Spoonbill specialist group、White Bellied Heron Advisory Committeeなどを務める。佐渡島におけるトキ野生復帰を主導してきた経験をもとに、生息域内保全と生息域外保全を連動させた保全生物学的研究に取り組む。



(備考)

本活動は、環境省による許可を得て実施しています。また、環境省生物多様性保全推進交付金、日本動物園水族館協会野生動物保護募金および東京動物園協会野生生物保全基金の助成を受けています。野生個体群のモニタリングについては信州大学、山梨県富士山科学研究所による協力をを受けています。人工孵化・育雛については森林総合研究所、北海道大学地球環境科学研究所、(社)野生生物生息域外保全センター、国立環境研究所等による専門的な支援を受けて実施しています。

繁殖地におけるアカモズの撮影・取材は、本種の絶滅を招く要因となる恐れがあります。そのため、日本国内の生息地については非公開とさせていただきます。生息地への訪問は自粛してくださいませようお願いいたします。